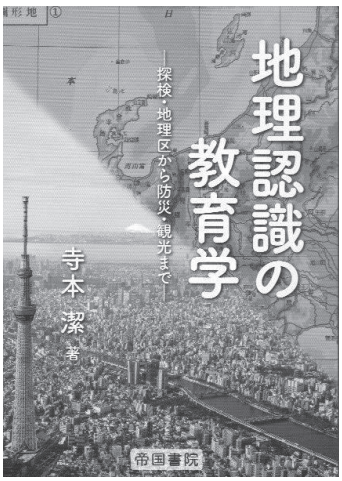
文献紹介

寺本潔著『地理認識の教育学』

帝国書院，134 頁，2021 年 3 月 25 日，2200 円＋税

近藤　裕幸



本書は，玉川大学教授（前愛知教育大学教授）である寺本潔氏による，多岐にわたる氏の研究成果を集大成した著作である。本書の構成は以下の通りである。

第 1 部　探検：子どもにとっての「場所の体験」と空間認識の発達
第 2 部　地理区：国民科地理の再評価
第 3 部　修学旅行史：浅井治平による旧制中学校における修学旅行指導
第 4 部　防災：防災の地理認識と社会資本の役割
第 5 部　観光－その 1：教育旅行で培う地理認識と観光教育
第 6 部　観光－その 2：実践的な観光教育のための 5 つの教材コンテンツ
第 7 部　観光－その 3：観光産業を支える情報の働きの授業

第 1 部で，氏は子どもの地理認識の育成のためには，探検行動が重要であるにもかかわらず，昨今の大人の過干渉や過放任によって，その育成が困難になっていることに対して警鐘を鳴らしている。

第 2 部では，国定教科書である『初等科地理（上・下）』を取り上げ，忠君愛国が信奉されていた時代の中で，今日でも参考になる進歩的な内容が見られることを指摘した。

第 3 部では，戦前に第一東京市立中学校で教鞭を執っていた浅井治平（1891-1974）の修学旅行指導が物見遊山ではなく，事前事後指導のみならず，修学旅行の最中でも地理学の見方や考え方を実地で学ばせるものであり，そこには今日の修学旅行の形態を見直す上で有益な視点があると述べている。

第 4 部は，頻発する自然災害から子どもたちが身を守るために，危険回避能力を育成したいとの気持ちからハザードマップ作りなどの授業実践がまとめられている。また，地域に残る歴史的な土木構造物を教材化することで，地域を見直すことができるとも指摘する。

第 5 部～第 7 部は，氏が近年熱心に取り組んでいる観光教育について，理論から実践そして将来への展望について叙述されている。具体的には，いくつもの観光教材を提示しつつ授業実践の成果を述べている。代表的なものとして，子どもたちが地元を見直すときに「自然・施設・イベント・生活文化・歴史・食べもの」の 6 つの視点（「観光の 6 枚の花びら」）から考えさせるなど，子どもたちが考えやすいように工夫した教材が挙げられている。この 6 つの視点からもわかるが観光とは多くの業種に波及するものであるから，観光を取り上げることは地域の見直しにとって鍵になると述べ，さらに，地域の観光振興を担う次世代を育成することの重要性を強く主張している。また，そのために「地理認識の教育学」が確かな土台になると述べている。

さて，第 1 部から第 7 部までの論考を見ると，氏の長きにわたる研究史の全容を見て取ることができる。評者の研究と重なるところは地理区や修学旅行などの地理教育史にかかわるところであるが，紙幅の都合もあるため，多くを述べることは控えたい。それよりも氏と評者の出会い，そして今日に至るまでの氏の影響力を述べることこそが本書の価値を物語ると思うため，そのようにさせていただく。

さて，評者が寺本氏に初めて会ったのは 2003 年の

日本地理学会の大会（東京大学）でであった。この時評者は初めての学会発表であり，その際に寺本氏より声をかけていただき，その後も折に触れてご指導を頂戴することになる。7 年後，奇しくも，評者は氏の後任となり，愛知教育大学に赴任することになった。それから 10 年以上経過するが，何年たっても氏の地理教育界における高名は衰えることなく，教員にとって大きな支えになっていることを実感した。それは，氏の研究は，探検・防災・観光いずれをとっても子どもたちの地理認識を養成しようという強い気持ちからでてくる数々の実践，研究に裏打ちされたものであるからである。それは本書のタイトルにも表れている。つまり，『地理教育法』ではなく，あえて『地理認識の教育学』，つまり教育が中心にあり，子ども達の成長を地理的視点から支えようとする思いを見ることができるのだ。

従って，教育学，そして地理学に関わる全ての方々に本書の熟読を勧める次第である。さらに進めてこの著作のもとになっている氏の原著論文に目を通せば，さらに理解が深まり，氏の慧眼を知ることになるだろう。

（近藤裕幸）